

(1)その他、特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付け( ISI citation など)など。\* ISI データのない場合は、可能であればいろいろな指標を使って国内的位置づけを示す。

分野	取組と成果、世界的位置づけ	18年度の状況																																			
<p><b>特筆すべき教育活動</b></p>	<p>平成19年度の文科省「がんプロフェッショナル養成プラン」に本学病院は、福島県立医大・山形大と連携して申請し、採択が内定した。このプランは、高度がん医療者の教育・育成を目指すものである。申請にあたっては、加齢研・石岡教授(癌化学療法研究分野)が中心的な役割を担った。</p>	<p>厚労省の「がん診療連携拠点病院」に、本学病院が国立大学としては初めての認定を受けた。本拠点は高度がん医療者を育成するものである。申請にあたっては、加齢研・石岡教授が中心的な役割を担った。</p>																																			
<p><b>特筆すべき研究活動</b></p>	<p>Web of Science を用いて、加齢研が発表した論文数について統計をとったのが、下の表である。加齢研は平成5年に(旧)抗酸研より改組転換し研究所名を変更しているので、データは平成5年から現在までの14年間をカバーするものである。総論文数は1,473報であるが、そのうち50回以上、引用された論文は150報、10.2%に相当する。表では、加齢研のデータと他大学の医学系研究科・研究所との比較も行っている。ただし京大・ウイルス研と阪大・微生物研は改組によっても、所名変更を行っていないので、全論文数は設立以来のものであり、一概には比較できない。50回以上の引用論文の割合(%)は相互比較が可能であり、それによると加齢研は、諸大学の医学系研究科に比べれば、注目度の高い論文を多く発表してきたと言える。しかしながら他研究所に比べると一層の努力が必要であることがわかる。</p> <table border="1" data-bbox="312 1211 1217 1373"> <thead> <tr> <th>大学</th> <th>部局(英名)</th> <th>教員数</th> <th>全論文数</th> <th>50回以上の引用</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東北大学</td> <td>加齢研(IDAC)*1</td> <td>約50人</td> <td>1,473報</td> <td>150報(10.2%)*3</td> </tr> <tr> <td>東京大学</td> <td>医学系研究科(Grad. Sch. Med.)</td> <td></td> <td>5,098報</td> <td>284報(5.5%)</td> </tr> <tr> <td>京都大学</td> <td>医学系研究科(Grad. Sch. Med.)</td> <td></td> <td>6,722報</td> <td>322報(4.8%)</td> </tr> <tr> <td>大阪大学</td> <td>医学系研究科(Grad. Sch. Med.)</td> <td></td> <td>6,121報</td> <td>248報(4.0%)</td> </tr> <tr> <td>京都大学</td> <td>ウイルス研究所(IVR)*2</td> <td></td> <td>2,720報</td> <td>462報(17.0%)</td> </tr> <tr> <td>大阪大学</td> <td>微生物研究所(RIMD)*2</td> <td></td> <td>4,192報</td> <td>534報(12.7%)</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1.(旧)抗酸菌病研究所は含まないデータである。即ち、平成5年から平成19年までの14年をカバーする。                  *2.京大・ウ研と阪大・微研は改組の際に、研究所名の変更はなかった。よってデータは設立以来の数字と考えられる。京大・ウ研は設立以来、51年を経過している。一方、加齢研は改組により所名の変更があったので、*1のデータは改組以降のものであり、(旧)抗研の数字を含まない。                  *3.50回以上の引用の150報のうち、IF10以上の雑誌に掲載されたのは41報である。</p>	大学	部局(英名)	教員数	全論文数	50回以上の引用	東北大学	加齢研(IDAC)*1	約50人	1,473報	150報(10.2%)*3	東京大学	医学系研究科(Grad. Sch. Med.)		5,098報	284報(5.5%)	京都大学	医学系研究科(Grad. Sch. Med.)		6,722報	322報(4.8%)	大阪大学	医学系研究科(Grad. Sch. Med.)		6,121報	248報(4.0%)	京都大学	ウイルス研究所(IVR)*2		2,720報	462報(17.0%)	大阪大学	微生物研究所(RIMD)*2		4,192報	534報(12.7%)	<p>(1)2006年のネイチャー誌関連では、Nature(海老名准教授)、Nat. Cell. Biol.(高井教授)、Nat. Rev. Cancer(石岡教授)に各1報が掲載された。それ以外にもインパクト・ファクターが10点以上の雑誌に5報が掲載された。</p> <p>(2)我が国唯一の大規模脳MR画像データベースの解析を行い、脳の正常加齢、および加齢を促進する因子(肥満など)を明らかにした(機能画像医学分野、福田教授)。</p> <p>(3)血管の血圧反射機能診断装置を発明し、特許申請した。また埋込型補助人工心臓の動物実験長期生存世界記録を現在も更新中である(493日、病態計測制御研究分野、山家教授)。</p>
大学	部局(英名)	教員数	全論文数	50回以上の引用																																	
東北大学	加齢研(IDAC)*1	約50人	1,473報	150報(10.2%)*3																																	
東京大学	医学系研究科(Grad. Sch. Med.)		5,098報	284報(5.5%)																																	
京都大学	医学系研究科(Grad. Sch. Med.)		6,722報	322報(4.8%)																																	
大阪大学	医学系研究科(Grad. Sch. Med.)		6,121報	248報(4.0%)																																	
京都大学	ウイルス研究所(IVR)*2		2,720報	462報(17.0%)																																	
大阪大学	微生物研究所(RIMD)*2		4,192報	534報(12.7%)																																	
<p><b>特筆すべき社会貢献活動</b></p>	<p>(1)脳科学研究の成果を社会に還元すべく、機能画像医学研究分野(福田教授)と脳機能開発研究分野(川島教授)が精力的に活動している。その活動がメディア(新聞、テレビ)に取り上げられる頻度は多く、全国的に知名度は抜群である。地元においても例えば、仙台市科学館が企画した展示・講演会「脳のかたち・心のちず」にお</p>	<p>(1)川島教授(脳機能開発研究分野)が、科学技術への顕著な貢献 in 2006(ナイスステッ</p>																																			

	<p>いて全面的に協力している(平成19年2月6日~3月4日)。“脳科学に貢献する加齢研”という評価が定着しつつあるのではなかろうか。</p> <p>(2)加齢研の臨床系5分野は病院の診療科を兼務していることもあり、その診療活動はメディアに報道され、高い評価を受けている。例えば呼吸器再建研究分野(近藤教授)の実施している脳死肺移植は必ずといってよいほどニュースになり、社会によく見える活動といえよう。</p> <p>(3)小椋教授は論文格付け機関である Faculty of 1,000 に選ばれ、生命科学関係の論文の評価を行った。</p> <p>(4)日本国政府への直接の貢献としては、内閣府男女共同参画会議専門委員として、川島教授が活躍している(平成19年2月より)。</p>	<p>ブな研究者2006)として、平成18年12月に、文科省科学技術政策研究所より顕彰された。</p> <p>また同教授は海外からも、Top 50 innovators in New Media for 2006 (Producers Guild of America New Media Council)として、平成18年9月に表彰された。</p> <p>(2)平成18年9月11日に、「企業から見た産学連携、及びバイオベンチャーの現状」と題して講演会を開催した。講師として製薬会社、バイオベンチャーのトップを招き、種々討議が行われ、今後のバイオにおける連携を模索する上で極めて有益であった。</p>
--	---	---